

海第十六号の作品について

海のホームページには、「ニュース」等のコラムを設け、海の作品に対していたいた批評や感想等の内容の要旨を掲載し、同人個々の参考になるようにしています。

第十六号（通巻第八十三号）の作品に対しお寄せいただいた感想等の一部（抄）を、左記に掲載させていただきます。

ご意見をいただいた各位（お名前は略）に、心から感謝申し上げます。

◇海へのことば

井本 元義「若さと老い」

・実績をあげている作者のことばは重い。

◇エッセイの部

牧草 泉「『三冊のロング・グッドバイを読む』（松原元信著）」を讀んでの雑感」

・訳本等の違いによる、和訳の違いを比較するという試みが面白い。

井本元義「あちらこちら文学散歩（第三回）」

・ランボオの伝記とパリの街区を巡る楽しさがあり、これぞ文学という香を醸している。

◇詩の部

群 青「ひとりの、物の生産の、終わるとき」

・男のシニカルなニヒルの呟き。

・詩語の扱いには慣れているが、豊かなイメージを出すには、もう少しの工夫が必要であろう。

笹原由理「恐れ」ほか

・題名と作品内容が、響き合っている。
・密度ある言葉の間の取り方がうまく、楽曲になっている。

鳥井まみ「話つ花（七）」

・イラストとともに、軽妙な語り口が嬉しい。

牧草 泉「小さな音符」ほか

・若かったときを思い起こし、感動を覚えた。

◇小説の部

井本元義「星と花 R 共和国奇譚」

・暗喩を際立たせた作風に、独特の魅力がある。

・文芸的に味わえる密度の濃い作品である。

・主人公の潜在意識を止揚していく、純文学的手法が優れている。

高岡啓次郎「月光の影（第二回）」

・ストーリーを、丹念に追い込んでいく醍醐味があり、筆力がある。

・人間模様の描き方が達者である。

中野 薫「機縁因縁」

・力作であり、迫力がある。

・作者の洞察力と筆力が一致し、上質の社会派中間小説となっている。

有森信二「火の山」

・長編の中の一編なのか、そうではないのかなどが曖昧。課題は多い。

・面白い試みであるが、序と本文とが二つに分かれ、功を奏していない。

◇海全体の部

・総合文芸誌としての工夫、努力が感じられる。

・緊迫感を感じさせる編集内容となっている。

・字数、行数が多くなり、窮屈である。

・文学の意気軒昂が読み取れるまでに成長してきた。

・良い作品を並べた誌として読んだ。

・詩、エッセイ、翻訳、小説のいずれも、一定レベルにあるとして読んだ。
(まとめ・有)